広島県五日市町（現広島市佐伯区）にあった広島戦災児育成所を巣立った人たちの間で、その腕前が話題に上る江戸指物職人がいる。

木村正さん(68)。東京都台東区の工房を訪ねると、使い込んだ工具や立派な一枚板が並ぶ中、黙々と仕事を続けていた。眼鏡越しの視線が厳しい。

爆心地から一・三キロ離れた竹屋国民学校（現中区の竹屋小）で被爆した。原爆は両親と弟の命を奪った。

行李一つで上京

親類の家を転々とした後、育成所に落ち着いた。中学を卒業し、広島市内の家具工場に三年勤めた。それから、兄を頼って上京。知人が紹介してくれた指物職人の家で住み込み修業を始めた。

「行李一つで出て来た若造を一人前にしてくれた親方には、いくら感謝しても足りないね」

無口で厳しい親方と面倒見のいいおかみさん。大都会の片隅で、まるで絵に描いたような職人夫妻が、新しい「親」となった。

修業に打ち込んだ。家具メーカーによる大量生産が主流になった高度成長期。くぎを使わない伝統技法を親方に学んだ。息子を後継者にする職人が多い中、親方は、仕事に励む一番弟子の木村さんに何かと目をかけてくれた。

絆むすんで ⑥

広島戦災児育成日誌から

匠の世界

出会い支えに道究める

自宅兼工房で作品の仕上げに打ち込む木村さん。負けん気が東京での暮らしを支えた（撮影・荒木肇）

「負けたくない」

数少ない休日は、大学進学や就職で上京した育成所の仲間たちが集まって暮らす下北沢（世田谷区）のアパートへ向かった。終電まで酒を飲んだ。憂さを晴らした。互いに身を寄せ合ったそんな日々。

「親がいない。つらくても逃げて帰る場所がない。みんな負けたくないし、負けられなかった」

修業が十年に及び、弟弟子の面倒を見るようになったある日、親方が初めて酒を勧めてくれた。長火鉢を挟んで向き合い、「さあ一杯飲め」。一人前と認められたようでうれしかった。

三年後、のれん分けを許された。取引先を一緒に巡った親方は「うちと同じ値段で扱ってくれ」と頼んでくれた。独立した日から商売敵になる厳しい世界。親方の背中が大きく見えた。

今の場所に自宅兼工房を構えて三十一年たつ。父のように慕った親方も一九八四年に亡くなった。そのころ、木村さんは自らの弟子に独立を許した。親方が自分にしてくれたように、得意先も紹介した。義理と人情を大切にした親方のしつけを守った。

三人の子に恵まれ、古希が間近い今も、漆塗り職人の妻信子さん(66)と製作に打ち込む。匠の技を究める。

育成所の日々をつづった日誌のコピー。手渡すと表情が緩んだ。「育成所から海が見えてね。それに、みんなで川に出てアユをすくったなあ」

人生の支えは何だったのですか―。そう尋ねてみた。わずかに呼吸を置き、口を開く。

「人との出会いです。いい親方に出会い、いい仲間に出会った。生活は苦しいけど、幸せです」

（石川昌義）

＝おわり